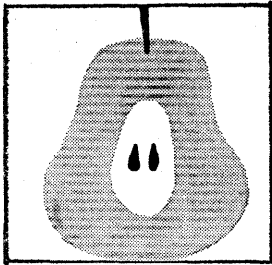


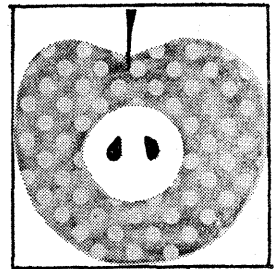
秋の一日

大自然の中のおにぎりの味

佐々木和子



きょうの子供達の登園光景は、いつもより一段とにぎやかである。それもそのはず、カラリと晴れあがった気持ちのよい朝と、大好きなお母さん手作りのおにぎり持参の登園だからであろう。本園では四月から十一月迄の毎月二回を「おにぎりの日」と決めている。(平常は月曜日・金曜日迄完全給食が実施されている。四歳で入園した四月の下旬から「おにぎりの日」が実施されるのだが、おにぎりの日には雨天でない限り必ず園外に出かけて、そのつど、その場の自然の中でほおぶるのが恒



例となつてゐる。従つて「おにぎりの日」は「園外保育」であることを子供達はすでに知つてゐるので登園状況が楽し気なのである。

本町は、山と川と海のある町で自然も満喫するには事欠かない。四歳児はバス通園の為歩きなれないこともあつて、はじめは園の裏山……しだいに園周辺の田んぼの畔道……やがて七月中旬頃には年長児と連れ立って海まで(約二キロ)出かける。畔道に出かけていけば小川にはカラス貝、ドジョウ、オタマジャクシがみられ、最初の約束事などすっかり忘れ泥まみれになつてそれらの小動物とたわむれる。シロツメ草の相撲。首切り競争。首飾り編みなど自然物利用の遊びを伝授する格好の場ともなる。五歳児の場合は、進級と同時に隣接してゐる小学校の登校班と徒歩で通園するので、どの子供も足どりがしっかりしてくる。(因みに毎日片道四キロの道程を歩く子供は年長八九名中三一名いる。)従つて四月下旬のおにぎりの日から二十キロ位の道程を遠出している。桜の

花見をしながら時には桜の花びらの舞い散る下でのおにぎりの味は又格別のようなものだ。

入園、進級はじめの頃は発達段階に応じてそれぞれの場所を計画するが、四歳児が幼稚園に慣れはじめた頃、又、五歳児も年長児としての自覚が備わつてきはじめて七月頃から、更には季節的にも水遊びの楽しい時期なので、年少は「波にさらわれたりしないように海での約束や、合図を守つて遊ぶ。」「砂浜で貝拾いや、穴掘りなどいろいろな遊びを楽しむ。」「年長は「年少児と手をつないで歩いたり、一緒に遊ぶなどやさしくする。」「合図や指示に従わないと、波にさらわれたり怪我するなどの危険があることに気づく。」「海辺で貝を拾つたり、小動物をみつけたりして存分に遊びを楽しむ。……というねらいのもとに海までおにぎりを持って出かける。四歳児と五歳児の歩き方には随分差がみられる。しかし、教師が予想した以上に年長児は年少児の面倒をみてくれる。例えばズックが脱げれば立ち止まってなおしてくれたり、危険な国道では車道側を年長児が歩いたり……。」「いたわ

り” “おもいやり” ……など形として具体的には表現出来ないことなのだが、おもわぬ場面で情景がみられる。

一八四名の子供が延々と歩く様子に、近所の窓々からよく声がかかる。「どこさ行く？」（どこに行く）「海さ

いくんだでー海さよ！」（海に行くんだよ、海だよ！）

「天気よぐていがったなあ気づけて行くんだよ。」（天気よくて良かったね。気をつけて行くんだよ）さりげない会話のやりとりの中に、町民の暖かい心づかいが感じられうれしくなる。海でのひとときは、ひとりひとりの子供達に十分な満足を与えてくれる。波打ち際で波とたわむれる子供。砂を掘っては海水をためこむのに夢中な子供。小石や貝殻拾いの子供。波で打ち寄った廃品（ママレモンの空容器、いろいろな形のビニール空容器…）集める子供。波がひいたあとに小さな穴がいくつも出来るのに気づき、その穴の下はどうなっているのか掘りかえし、小ガニをみつつけ大声で「カニだ。カニだ。」と宝物発見の知らせをする子供。ビニール廃品を集めた子供が早

速駆けつけそれに小ガニを入れる。海水を汲んでカニの容器に入れる子供。次々と浜辺でドラマが広がっていく。かえりには弁当カバンの他に手に手に海で集めた宝物がしっかりとにぎられている。

今日は二期期になってはじめての “おにぎりの日” である。きょうの目的地は「望海の丘」であることも知っているが、この場所は年少時にも行っているが、今日の場合はグループで散策するという楽しみがある為格別張り切っている。距離も片道六キロということで途中の牧場迄通園バスを利用する。牧場主は友達のお父さん（在園児）なので、牧舎を自由に見せてもらえてうれしそうである。この牧舎から昨年とちがった経験をするのである。子供達が名付けたどんぐりコース、きのこコース、くりコース、つり堀コース…とグループ行動を開始する。どのコースを歩くかはあらかじめ相談で決めているので、もめる事もなく歩き始めるが途中で必ずラブルが生ずる。先頭を歩いている子供が気に入った木

の実(どんぐり、くり…)を最初に沢山拾ってしまふ…
というのが原因なのだ。後方の子供がその場所について
木の実を拾おうとすると、先頭の友達が「青組に負けそ
うだから逃げ」とうながすのである。四キロの道程、し
かも起伏の激しい山道をこんなトラブルをしながら黙々
と歩く。目的地近くまでバスで行く年少組が先きに到着
して、目的地から「ヤッホー」と呼びかける声に、目的
地迄には未だほど遠いにもかかわらず大声で応答してい
る。

四歳の四月から五歳の現在(九月)まで段階をふみな
がら経験してきた園外保育なので、ぐちや泣き事もい
わず歩き通す。少し秋の気配がただよった丘で、仲間と気
に入った場所を選んでの昼食は本当に楽し気である。勿
論かえりの弁当カバンには子供にとっての山の幸がいっ
ぱいつまっている、かえりは疲労度を考慮して年少・年
長全員バスでかえるのだが、バス待ちの間心細くなった
年少児が山の風の音をきき「先生、風が早く帰れってい

ってるよ」…:…:…:というのに対し年長児は「あれはね、又
おいでっていつてるのだよ」…:…:となくさめる。教師に
とって今日のねらいが十分果された会話のやりとりであ
る。

こうして四月からきょうまで、更に十月十一月と自然
の移りかわりと共に園外での経験や活動を取り入れてい
る。本園では「おにぎりの日」||「園外保育」||「遠外
歩育」としてとらえ二年間の計画を教育課程に位置づけ
ている。「心の豊かな人間性をはぐくむ。たくましい子
どもの育成をみざす」…:と教育目標を掲げているが、目
標達成の為に恵まれている自然を十分に活用し、地域に
根ざした幼稚園を子供と共に作るよう頑張っている。か
えりのバスで居寝りしている年長児をみてこの小さな足
で歩き通したことに涙がこみあげてくる。「あしたも元
気な笑顔を見せてね」と心の中でつぶやく。

(秋田県・西目町立西目幼稚園)